

●親子三人の写真

グアム日本人学校(全日制)
校長 工藤 雅敏

親が自分の子どもに満足に食事を与えず、暴力をふるう。挙げ句の果てには、その命までも奪ってしまう。信じられないような虐待事件があいついでいます。しかし、子どもに対する親の愛情というのは、決して、そんなものではありません。

高校生になる悦子さんは、生まれてすぐにお母さんが病気で亡くなり、一年後、お父さんは今のお母さんと再婚。しかし、それから二年もしないうちに、今度は、お父さんも交通事故で亡くなってしまいました。だから、彼女には、実の両親の記憶がほとんどないのです。

今年の夏休み、おばあさんの家に泊まりに行った時、仏間に呼ばれました。おばあさんは、仏壇の中から小さな包みを取りだし、悦子さんに渡しました。

「おばあちゃん、何、これ？」「写真だよ」「エッ？」
「悦子とお父さんとお母さん、三人の写真だよ」
「エー!？」

その写真は、悦子さんの実のお母さんとお父さんが、生まれたばかりの悦子さんを抱いて、にっこり笑っている写真でした。おばあさんが、話を始めました。

「悦子のお父さんは、即死だった。遺品の中に、この写真があったんだよ。きっと、肌身離さず持っていたんだろ。私は、誰にも見せないで隠したんだよ」

「『死に別れの男には嫁ぐな』と言うだろ。今のあんたの母親の気持ちを考えたら、かわいそうでかわいそうで、とても、これは見せられなかったんだよ」

「あれから十三年がたった。悦子がもし、ぐれるようなことがあったら、わたし、この写真を見せて説教するつもりだった。だけど、もう、大丈夫だろう。この写真を悦子に返すよ。死んだ両親の供養とって、大事にしてください」

実は、悦子さんは心の中で、ご両親を恨んでいました。友達が親と仲良くしている姿を見るたびに「何で私だけが」「私なんか、生まなきゃよかったのに」と、思っていたのです。でも、今日のおばあさんの話で、そんな気持ちも吹き飛びました。むしろ、幼い私を残して死んでいった母親の無念さや、親子三人の写真を肌身離さず持っていた父親の気持ちを考えると、涙が止まりませんでした。

こんな話があります。子どもを残して死んだ親は、残した子どものために、神様の前に行列をつくります。順番がくると一つだけ、子どもが幸せになるようお願いができます。そして、また、列の最後に並ぶのです。

今、悦子さんは、何か一つ願い事が叶うたびに、親子三人の写真に向かって、「お父さん、お母さん、順番がきたんだね。ありがとう」とお礼を言うのです。

親子の愛情の大切さを、子どもたちに伝えていきたいと思えます。

● 日本人学校 幼稚部より

“ようちぶまつり”

幼稚部では、子どもたちに日本のお祭りを体験させたいと、“ようちぶまつり”を計画しました。

浴衣や甚平を着て、手作りのお神輿を担ぎ、中庭から体育館まで『わっしょい、わっしょい』の掛け声をかけ元気に歩きました。

今年のお神輿のテーマは、“カニ”と自分たちで決めて作りしました。遠足で出かけたUnder Water Worldのカニが印象的だったのかもしれません。

大阪道頓堀のかかに道楽のイメージで、長い手足に折り紙で作った提灯をぶら下げてお花で飾り付けました。カラフルなお神輿が、楽しそうに揺れていました。

また、“はびはび音頭”という盆踊りを、小学生も飛び入り参加して踊りました。水ヨーヨー釣り、輪投げ遊びもして、気分はすっかり夏祭り。

かき氷も美味しくいただき、楽しい夏祭りになりました。



このページに関するお問い合わせは日本人学校 補習授業校事務局734-8024/25までお気軽にお電話ください。詳細はホームページもぜひご覧ください。 <http://japaneseschoolguam.com/>